

## ニュージーランドの国立公園 ～トンガリロ国立公園、その成立の真実～

親泊 素子

江戸川大学国立公園研究所

### はじめに

世界の国立公園制度は1872年に設立されたアメリカのイエローストーン国立公園がはじまりとされ、続いて19世紀に三つの国で国立公園が誕生した。それらはオーストラリア(1879)、カナダ(1885)、ニュージーランド(1894)である。その中でカナダはアメリカの隣国であるが故に国立公園がいち早く伝わったことは容易に理解されるのだが、遠く離れたオセアニアで次々に国立公園が生まれたと言うのは気になる話である。さらにニュージーランドは先住民のマオリ族の首長がニュージーランド政府に部族の聖地を寄贈することによって国立公園を成立させたと言われているが、その話はさらに興味を引く。なぜなら本来マオリ族は先祖代々の土地を大切に守ってきた先住民のはずであり、その中でも特に聖地(tapu)とされる土地であれば、なおさらその土地に対する執着があるはずである。それをマオリの首長は政府に寄贈したのである。また、あの当時であっては新しい概念の国立公園というものをマオリの首長であったホロヌク・テ・ハウヘウ・トゥキノIVはどこでどのように知りえたのであろうか？本論はニュージーランド最初の国立公園であるトンガリロ国立公園設立の背景についてその調査研究を行った。

### I ニュージーランド国立公園制度について

ニュージーランドは国土面積が27.5万km<sup>2</sup>、人口が約495万人(2019年現在)の南西大平洋に位置するオセアニアの小国である(外務省online)。二つの大きな島と小さな島々からなっており、イギリス英連邦の一つで、イギリス女王を国家元首とする立憲君主制国家である。首都は北島のウェリントンで、そこに政府機関が集中しているが、経済、商業の中心地は北に位置するオークランドであり、ロトルア、タupo、ワイトモ等の有名な観光地があるのも北島である。また陸地面積が最も大きい南島の中心都市はクライストチャーチである(外務省online)。

現在ニュージーランドには29,483km<sup>2</sup>の面積が国立公園に指定されており、これは国土面積の約10分の1にあたる広さである。ニュージーランドの国立公園も他の多くの国同様、国の美しい自然と生物多様性の保全、そしてそれらを国民の公共的な利用に資する目的で法律が制定され、その管理が行われているが、ニュージーランドの最初の国立公園はトンガリロ国立公園で、1887年に北島のルアペフ(Ruapehu)、トンガリロ(Tongariro)、ナウルホエ(Ngauruhoe)の3つの山頂周辺1マイル(1.6km)をマオリ族の首長が寄贈することから始まった。これらの地域はかつてのマオリ族の聖地であり、寄贈する際にはその場所を不可譲とするという条件がつけられた。そこでニュージーランド政府はこの3つの山頂とその周辺の土地を含めて1894年にニュージーランド最初の国立公園を設立したのである(Dept. of Conservation, NZ Gov. online 1)。

1900年にはエグモント(Egmont)国立公園が設立され、1904年にフィヨルドランド(Fiordland)が保護区(public reserve)に指定され、景勝地保護法(Scenery Preservation Act)と観光及び健康リゾート規制法(Tourist and Health Resorts Control Act)によって管理された。その当時はトンガリロとエグモント国立公園は公園委員会(Park Boards)によって管理されており、保護区だったフィヨルドランドは土地&調査局(The Department of Lands and Survey)という別組織によって管理されていた。その後国立公園行政の見直しが行われ、1952年に国立公園法が公布されると、今までバラバラだった管理組織が統一され、土地&調査局(The Dept. of Lands and Survey)の国立公園部(The National Parks Authority)に管理が任せられるようになった。現在、ニュージーランドには13の国立公園があり、その公園管理は環境省の自然保全局(The Department of Conservation)が担っている。又、公園リストは以下のとおりである(同上)。

表 I-1 ニュージーランドの国立公園

名 称	英 名	面積 (km <sup>2</sup> )	設立年	場 所	備 考
トンガリロ	Tongariro	786	1894	北島	最古
ワンガヌイ	Whanganui	742	1986	北島	
エグモント	Egmont	342	1900	北島	
アベル・タスマン	Abel Tasman	237	1942	南島	最小
カフランギ	Kahurangi	4,529	1996	南島	
ネルソン・レイクス	Nelson Lakes	1,019	1956	南島	
パパロア	Paparoa	430	1987	南島	
アーサーズ・パス	Arthur's Pass	1,185	1929	南島	
ウエストランド・タイ・ポウティニ	Westland Tai Poutini	1,320	1960	南島	
アオラキ/マウント・クック	Aoraki/Mount Cook	722	1953	南島	
マウント・アスパイアリング	Mount Aspiring	3,562	1964	南島	
フィヨルドランド	Fiordland	12,607	1952	南島	最大
ラキウラ	Rakiura	1,683	2002	スチュアート島	最新

(出典: <https://www.doc.govt.nz/parks-and-recreation/places-to-go/national-parks/>)

## II トンガリロ国立公園成立の背景

### 1. マオリ族とトンガリロ

マオリ族は1280年にポリネシアのクック諸島、ソシエテ諸島、マルケサス諸島からニュージーランドの北島に7艘のカヌーを使ってやってきたと言われている。この7艘のカヌーの中のアラワ号にはガティ部族の司祭であったナトロイランギ (Ngatoroirangi) が乗っており、このナトロイランギがマオリ族の祖先だと言われている。口伝伝説では、彼は司祭であると同時に探検家であり、ベイ・オブ・ブレンティに上陸した後、北東内陸部からロトルア、タウポ湖地域に足を踏み入れ、さらにその先のトンガリロ山の登頂を目指したとされている。ところがその途中で凍死しそうになり、ホワイト島に残っていた2人の妹に「火をもってきてくれ」と頼んだところ、その声が南風によって妹のところまで届き、姉妹は火となって地中から助けに現れた。彼女たちが通ったあとには間欠泉と火山ができ、ナトロイランギは一命を取り留めることができたという。この伝承により、マオリ語で冷たい「南風」を意味するトンガ(tonga)と、「捕えられた」を意味するリノ(rino)から「Tonga-riro」という名前がその山につけられたという。その後、そのトンガリロはマオリ族の聖地となったのである (Dept. of Conservation, NZ Gov. online 2)。

やがて北島に上陸したマオリは周辺の森林地帯で農耕生活を始めたが、徐々に狩猟も行うようになっていった。彼らの狩猟対象はアザラシやニュージーラン

ド原産のダチョウに似た無翼巨鳥モアであり、特にモアはマオリにとっては必需品となっていった。なぜなら、モアは食料源としてだけでなく、釣り針や装身具、工具材、武器等、生活のあらゆる面に利用されたからである。こうしてマオリは徐々にモアを追いかけ狩猟範囲を拡大していき、居住地域も北島から南島へと広がっていった。しかし1300年代をピークとしてモアの個体数がだんだん減少していき、1500年代にはついに絶滅してしまった。その結果、マオリの生活もポリネシアからもってきたタロイモやサツマイモなどの栽培や、魚介類、海獣等を捕獲することで生活を維持せざるをえなくなっていったという。やがて、人々はそれぞれの地域で独自の生活スタイルを確立し、北部では植物栽培を中心に、南部では海獣を主要な食糧源として生活をするようになっていった。また部族間での抗争が繰り返されるようになり、パといわれる砦を自衛のために建設した。パはニュージーランド全域でかなりの数がつくられたと言われており、特に北島北部に多く残されている (同上)。

### 2. テ・ヘウヘウ・トゥキノ (Te Heuheu Tukino) 一族とトンガリロ

トンガリロの山々を国立公園地域とするよう寄贈したといわれているテ・ヘウヘウの祖先はガティ部族の司祭であったナトロイランギとされているが、このテ・ヘウヘウの治世は18世紀の末に始まった。テ・ヘウヘウはテ・ワカイトイ (Te Wakaiti) をプカワ (Pukawa) の戦いで勝利した後タウポ一帯の首長となった。このヘウヘウという名前がつくようになったのはテ・ヘウヘウ・トゥキノ I にあたるヘリア (Herea)

が父親と亡くなった親戚の遺体を探しに行ったところ、タウポ湖西岸のワイホラ(Waihora)の洞窟の外に生えていたマヘウヘウ (maheuheu)という植物の茂みに遺体が隠れていてなかなか見つけられなかった。その当時のヘリアの名前はテ・ランギマ・ヘウ(Te Rangima-heu)であったが、これを機にその名前を変えてテ・ヘウヘウ・トゥキノIを名乗るようになった。このヘリアとその妻のランギハホ(Rangiaho)の間に生まれた長男がマナヌイ(Mananui)で、Te Heuheu Tukino IIを継いだのである。それ以降、長男にヘウヘウ・トゥキノの名前がつけられるようになった。1846年の土砂崩れでテ・マナヌイ・ヘウヘウ・トゥキノIIが亡くなり、ヘウヘウ・トゥキノIの次男のイウイカウ(Iwikau)がテ・ヘウヘウ・トゥキノIIIを継いだ。次のテ・ヘウヘウ・トゥキノIVのホロヌク(Horonuku)は亡くなったテ・マナヌイ・ヘウヘウ・トゥキノIIの長男で、叔父のテ・イウイカウ(Iwikau)・ヘウヘウ・トゥキノIIが1862年10月に亡くなるとテ・ヘウヘウ・トゥキノIIIを受け継いでトゥキノIVとなったのである。この人物、ホロヌクこそがトンガリロの山頂を寄贈したマオリ族の首長である。ホロヌクの父親のマナヌイは人々にも恐れられる勇士として知られ、数々の抗争で勝利を収めていた。1843年にトワレットア(Ngati Tuwharetoa)にG.A.セルウィン(Selwyn)宣教師が訪れた時にも彼は教会にも英国王にも関心を示さなかった。それどころか彼はむしろキリスト教徒になることを拒否し、ワイタンギ条約に署名をすることも拒否した人物でもあったのである(Te Ara Encyclopedia of NZ online)。

### 3. ヨーロッパ人の入植

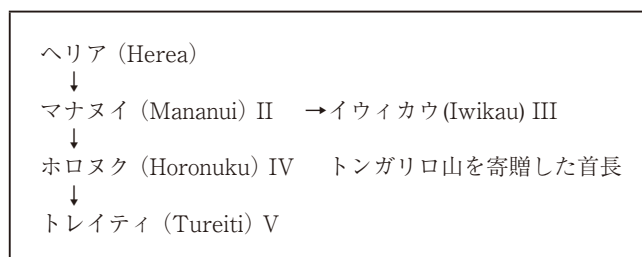
ヨーロッパ人が最初にニュージーランドの島を発見したのはオランダ人の探検家のアベル・タスマンで1642年12月13日のことであった。タスマンはオランダの地名のゼーランドにちなみ、ゼーランドア・ノヴァとなづけたことがニュージーランドの語源となった。次にヨーロッパ人がこの島を発見したのはさらに127年が過ぎた1769年のことで、今度はイギリス人の探

検家のジェームズ・クックが北島を見つけ、翌日に上陸を果たしたのである。その後、半年をかけて北島、南島を周航しながら海岸線の地図を完成させて、この島をイギリスの植民地として宣言したのである(NZ Gov. online 1)。

このクックの発見をきっかけに、やがてイギリス本国から交易、捕鯨、宣教を目的としてニュージーランドへ入植してくるようになった。1807年にはマスケット銃が持ち込まれ、先住民同士の争いにもこの武器が用いられるようになってきた。こうして1810年代、20年代、30年代はマスケット銃を使い、入植者とマオリ、或いはマオリ同士の戦いで、多くのマオリが殺された。一方で1830年までに約2,000人のヨーロッパ人がニュージーランドに居住するようになっていったが、その中にはオーストラリアの流刑地からの脱走者も多くおり、治安が悪化していった。そこで、イギリス政府は1833年5月にジェームズ・バズビー(James Busby)をニュージーランドの駐在弁務官に任命した。任地に着いたバズビーはニュージーランドの交易をスムーズに運ぶためと同時にマオリたちと仲良く協力をしながら政府を作っていこうという姿勢を示すために、翌年の1834年3月にはマオリの首長たちを集め、いくつかの国旗の中から彼らにニュージーランドの国旗を決めさせ、これをもとに彼らに独立宣言書の署名を行わせた。その結果、1835年10月25日にニュージーランド北部にニュージーランド部族連合国を誕生させたのである(同上)。

やがて1838年にエドワード・ギボン・ウェークフィールド(Edward Gibbon Wakefield)がニュージーランド会社を設立すると、ニュージーランドへの移民は加速し、また、マオリたちはマスケット銃獲得の為、次々に土地取引に応じ、やがて、多くの土地がニュージーランド会社の手に移ってしまった。民間会社による組織的な入植者の送り込み、マオリ部族間での抗争の激化、そしてフランスの土地購入の動き等を背景として、イギリス政府は1840年にウィリアム・

表I-2 テ・ヘウヘウ・トゥキノの家系図



ホブソン(William Hobson)をニュージーランドに派遣し、マオリの首長50人とワイタンギ条約を結び、ついにイギリスの直轄植民地としたのである。この条約は1.マオリの主権を英王に譲渡する、2.土地、森林、水産資源などの所有権は保護される、3.英国国民として保護特権を与える、という内容であった(同上)。

この結果、ニュージーランドはイギリスへ正式に併合され、イギリスの直轄植民地となり、初代総督にはそのまま代理総督だったホブソンが引き継いだ。しかし、このホブソンが1842年に脳卒中で死去すると、その後継者としてロバート・フィッツロイ(Robert FitzRoy)が指名された。しかし、着任した次の年の1843年にワイロウ大虐殺事件が起こった。これはワイロウ谷の土地を巡る争いで、22人のヨーロッパ人移住者と4人のマオリの死者をだしたワイタンギ条約の後の最初のヨーロッパ人とマオリとの衝突であった。フィッツロイ総督は、この事件を調査した時に、ヨーロッパ人の入植者の行動が違法だったことが分かり、また、できるだけマオリとの対立を避けたかったために、ニュージーランド会社にマオリの土地に対する対価を支払うように要求した。しかし、マオリに対する咎めがなかったことが、逆に入植者の不満を高め、彼は評判を落とし、植民地政府は窮地に陥った。後に彼はイギリスに呼び戻され、その後任として、南オーストラリアの総督であったジョージ・グレイ(George Grey)が代理を務めることになった(同上)。

#### 4. マオリ戦争(土地戦争)

ワイタンギ条約はしかしながら、当初からこの内容に対する見解の相違があり、植民地政府による土地政策はヨーロッパ入植者にもマオリにも失望を与えていた。入植者たちは常に土地の不足を訴え、マオリは政府の買い上げ価格の低さに不満を抱いていた。やがて土地の測量等を巡る小競り合いが繰り返されるようになり、ついに1854年に北島の南タラナキ地方のマナウポウ(Manawapoa)で、2,000人近いマオリの首長が集まり、土地の不売運動を訴え、マオリの部族を結成し、1858年にマオリ王擁立運動(キングタンガ)を起こした。多くのマオリはこの運動に加わり、ついに部族連合による王国(キングカントリー)を樹立し、ワイカトのマオリ族首長だったポタタウ・テ・ワロワロ(Potatau Te Wherowhero)を初代のマオリ王とした(NZ Gov. online 2)。

しかし、1860年にキングの反乱軍がタラナキでイギリス軍と衝突し、ついにマオリ戦争とよばれる土地

戦争へと突入していった。タラナキの戦いは一時休戦になったが、1863年にはタラナキの北のワイカトへと戦いが広がり、入植者とマオリの双方に大きな犠牲者がでた。政府は同年に反乱鎮圧法(Suppression of Rebellion Act)を制定してマオリの権利を一時的に停止した。さらに翌年の1864年にはニュージーランド入植地法(New Zealand Settlements Act)を制定し、土地戦争に参戦しているマオリを「反乱民」として彼らの土地を没収した。このようにして、マオリの先祖伝来の土地が次々に没収されるようになってきた。そしてマオリの王と部下は西の丘陵地帯へと後退していった。そこは森林の多い丘陵地帯だったために、戦ったマオリのゲリラたちはそこで逃亡生活を送ったのである。この土地戦争の戦いは1872年にキングが屈伏して戦争が終結するまで続いた(同上)。

1881年に第2代マオリ王となったタフアオ(Tawhiao)が和平交渉を受け入れ、1884年にはイギリスに行き、政府に土地没収の不当性を訴えたが認められず、1885年にはついにキングカントリーは解放され、ヨーロッパ人による測量が開始された。このマオリ戦争の結果、ワイカト、タラナキ、タウランガ等、いくつもの地域で政府による土地の没収が行われた。こうして、1886年までには先住民土地裁判所は北島のかなりの土地の測量を行い、新たな土地所有者を作り出して行った。1886年から87年にかけて、約1,214km<sup>2</sup>のマオリ王国の土地の測量が行われた。主として政府とマオリの首長らとの土地について3カ所の先住民土地裁判所での調停が行われた(Boast, 2017)。

#### 5. トンガリ口の土地を巡る争い

ホロヌクは1862年に叔父のテ・ハウハウ・トゥキノIIIを継いでトゥキノIVとなったが、翌年の1863年にはジョージ・グレイ総督の政府軍がワイカトへの攻撃を始めた時には叔父の意志を継いで、ワイカトのマオリ族を助けるために部族を率いて参戦していたのである。しかし、ワイカトの戦いに敗れてタウポへ戻ってきた後に、彼はテ・クウティを支持したことで政府の追求を受けそうになった。しかし、政府は彼の強い影響力をおそれ、それ以上のことは追及しなかった。ホロヌクの部族の土地であるトワレットアはマオリ王国の中にあり、ホロヌクは政府がこれ以上侵略してこないようにキング運動を支持していたのである。ホロヌクは父親のマナウイのような勇敢な戦士ではなかったがとてもインテリで先を読む政治家でもあり、常に部族の為に心を配っていた。したがって、これ以上、政府に反抗することは賢いやり方ではないと考

え、ホロヌクはキング運動から最後には離れたのである(同上)。

しかしキングカントリーのホロヌクの領地の分割協議も始まり、ホロヌクも先住民土地裁判所に出頭するようになっていた。ホロヌクは父親のマナヌイがまだ1846年の地すべりに埋もれてその遺体はその山にそのままあるということで政府の土地分割について消極的であったが、ホロヌクの土地があるタウポヌイアティアのケースについて1886年1月より87年の9月迄、その分割協議が行われた。その結果、裁判所はこの地域を176の土地に分割をし、そのうちの25カ所を政府の所有とすることを決めた。しかも、この手続きは情け容赦のないもので、最初から政府がすでにもくろんでいたものであった。その中の6カ所の土地は3つの山々の周辺を囲む土地であった(同上)。

## 6. テ・ヘウヘウ・トゥキノの決断

裁判の分割協議の後に、ホロヌクは自分の娘婿のイギリス人のローレンス・M. グレース(Lawrence Marshall Grace)に「もし、トンガリロの山々が通常の手続きで裁判によって分割されてしまったらそれらの土地はいったいどうなるのだろうか？それらはおそらく白人達に売られていってしまうだろう。そうなるこの聖地(tapu)はなくなってしまいこの場所は何の意味もなさなくなってしまう。トンガリロは私の祖先であり、私の魂の場所でもあり、私の権力、権威(manā)はトンガリロにある。私の父の遺骨は今日まだここに横たわっており、私が死んだ後にいったい彼らの運命はどうなるのであろうか？」と悩みを打ち明けた。それに対してグレースは「それらの地域を政府の権力を用いて聖地にすればよいのでは？これが唯一誰もがこの土地に関わらずに永久にこのままにすることができるのでは」と提案をした。すると首長は「たしかにこれが最善の方法だろう。私と私の部族からの贈り物(Gift)として永遠の聖地とすることにしよう」と決意するに至ったのである(Dept. of Conservation online 2)。

この時には先住民土地裁判所はこの3つの山頂地域に対して19人の土地所有を認めていた。そこで、ホロヌクはこのグレースの提案をこれらの首長らと話し合い、政府に対して条件付きで土地の寄贈を申し出た。その結果、父親のマナヌイの遺体を含む彼らの先祖の亡骸をその山から移して、しかるべき墳墓を立てることを条件にその土地を寄贈した。政府はその条件を承諾し、1887年にホロヌクから先住民関係相だっ

たジョン・バランス(John Balance)に手紙が送られトンガリロの山頂の譲渡が承認された(同上)。

この時にホロヌクはジョン・バランス宛ての書状に「友よ、ルイス副長官の前で政府の要請に基づき国立公園として活用される目的とロトルアであなた方と話すことを条件に土地の寄贈についての署名をした。私は2つのことを話しておきたい。

一つは私の父であるテ・ヘウヘウ・トゥキノの件である。ラパ(Te Rapa)でうずもれてしまい、今だにその山中に眠っている。したがって彼をどこかの場所に移してそこに彼の墳墓を建立してほしい。かれは高い地位の首長で政府にはそれをする義務がある。私たちにはそれをする力が今はない。友であるルイス副長官は政府の承認の下に私の要求を受け入れてくれた。

二つ目の願いは、私はすでに年を取っており、私の一人息子がこれから部族を率いていくであろう。彼の名前はトレイティ(Tureiti)・テ・ヘウヘウ・トゥキノである。したがって、彼の名前を私の代わりに国立公園法の中に入れて欲しい。これが私の願いである。マオリ族とヨーロッパ人が国立公園を活用できるよう、トンガリロとルアペフを寄贈するに際しての私の政府への要求である」(同上)。

こうしてホロヌクは1887年9月23日に山頂を政府に寄贈し、ニュージーランドで最初の国立公園が誕生したのである。最初の証書で署名された面積は頂上付近のかなり小さな部分で、ルアペフの西側の傾斜部分は抜けていた。それらの地域はワンガヌイ(Whanganui)部族の所有であった。この寄贈された26.4km<sup>2</sup>は実際には国立公園とするにはかなり小さい面積で、その後イギリス政府によって買い足された。1894年10月にトンガリロ国立公園法が成立する頃には250km<sup>2</sup>にまで拡大されていた。1907年のL.コックダイ( Cockayne)の調査報告書では公園面積をこの倍にする提案がなされていた。そして現在では786km<sup>2</sup>にまで拡大されている。ホロヌクはこの土地を寄贈した翌年の1888年に死去した(同上)。

## 7. 現在のトンガリロ国立公園

トンガリロは北島のオークランドからは南に約330km、ウェリントンからは北へ320km行ったところにある。このオークランドとウェリントンを結ぶ鉄道幹線が走る路線上にトンガリロ国立公園へ行ける「国立公園駅」という名前の駅がある。駅自体はアメリカの西部劇にでてくるような殺風景な雰囲気ではあるが、「National Park」という駅名が出てくると、い

よいよトンガリロ国立公園にきたという気分になれる。国立公園の大半はマナワツ・ワンガヌイ地方だが、北東部はワイカト地方に所属している。気候は大部分が温帯なのだが、標高が高いため一日の温度差は大きい。年間の平均気温は13℃、最高気温は25℃、最低気温はマイナス10℃にもなり、標高1,500m以上の高いところでは冬になると雪が降り、ルアペフ山は北島で唯一のスキーリゾート地にもなっている(Dept. of Conservation online 1)。

また、トンガリロ国立公園に生息する植物相は多様で、1,000m未満のところはマキ科の森林が広がり、1,530mのところまではブナ林が広がっている。また、それより高い高度のところでは森林限界となり高山植物が広がっている。黄白色や赤の草本植物が広がり、外来種のギリヨウモドキもかなりの面積に広がっている。その他、夏には紫色のバラヘーベ、ヒナギク、山キンボウゲ、小さくて白い花を咲かせるジキタリス(キツネノテブクロ)、コゴメグサ、リンドウ等を見ることができる。さらにランやモウセンゴケも生息しており、酸性土壌の湿原でモウセンゴケの小さな白い花が咲いているのを見ることができる(同上)。

又、トンガリロ国立公園には56種類の鳥類がいるといわれており、その中でもヒヨドリやノースアイランドブラウンキーウイは絶滅危惧種に指定されている。また公園の森林地帯にはアオガラ、ニュージーランドロビン、エリマキミツスイ、ハイイロウグイス、ミドリイワサザイ、ニュージーランドミツスイ、ニュージーランドオウギビタキやニュージーランドバトを見ることができる。また1,600m以上の開けた草原地域では、タヒバリを時には見つけることができる。また、見ることは出来なくても、シダセッカの鳴き声を時として聞くこともできる。カカやニュージーランドファルコンやインコはめったに見ることはできないが、運がよければ他の鳥を追いかけて旋回する姿を目撃することができる。また、アオヤマガモは公園内の急流に生息し、キーウイは国立公園内の森林に生息している。それ以外の鳥類で、公園内に生息しているのは、ニュージーランドヒタキ、トゥイ、ハイイログリーゴーン、またかつてのトンガリロにはイギリスからの外来種などが移入され、現在では外来種問題が頭を悩ませている(同上)。

### III. 国立公園成立の真実

ニュージーランド国立公園設立に関するホロヌクの

聖地を寄贈する美談は広く多くの人々によって語り継がれてきているが、本研究を通して分かった事実は次のとおりである。

#### 1. やむを得ない決断

実はこの土地の寄贈はホロヌクの考えというより、すでに政府によってお膳立てされていたシナリオであったともいえる。ホロヌクが部族の為に聖地を守ろうとして、トンガリロと他の山々を“不可譲の保護区”として願い出たことは結果として国立公園成立の流れにつながったのであろうが、彼は最初から国立公園の土地とするように寄贈したのではなく、自分たちの土地が分断され、ヨーロッパ人たちによって開発されるのを避けるためのやむを得ない手段であった。彼は聖地を手放すことによって聖地を守ろうとしたのである。したがって、彼が意図したことは、ニュージーランド政府に完全に寄贈するというものというより、むしろ「共通の遺産」として差し出したつもりであった。ホロヌクはワイタング条約に署名をしてこなかったために、土地分割協議に同意しなければ、土地を強制的に没収されるおそれがあり、また、彼とその部族はイギリスの武力に抵抗できる力もなかった。したがって、この寄贈という手段が彼にとって残されたやむを得ない選択だったのである。そのためにその危機を義理の息子のローレンス・M・グレースの助言に頼り、1887年9月23日の書簡によって土地の寄贈が決まったのである。

#### 2. グレースの誤算

また、義理の息子のグレースが最初に考えたのは不可譲の保護区(inalienable reserves)として差出し、それをニュージーランド政府に保護してもらうことを考えていた。しかし、その段階ですでにニュージーランド政府はトンガリロの山々が農林業には適さない地形、地質であり、いかにしてその土地活用をすべきかを考えた時にヒントとしていたのが観光地としての利用であった。ニュージーランドの首相を務めたウイリアム・フォックス(William Fox)やジュリアス・ヴォーゲル(Julius Vogel)はすでにアメリカやニュージーランド国内の温泉地や景勝地を度々訪ねており、彼らはそれらの観光的な価値を十分理解していた。彼らは政治家になる前は実業家として活躍しており、イギリス人とはいえ、早くから政治、経済の発展的なモデルをアメリカの中に見出しており、アメリカを度々訪れていたのである。フォックスは1874年の政界引退を前にイエローストーンに関する法律を引用しながら議会でロトルアの温泉地の保護を訴えた。1878年に

ニュージーランド政府はイエローストーン法のコピーを入手し、それを参考に1881年に「温泉地保護法」(Thermal springs district Act 1881)を成立させた(Frost & Laing 2013, 73)。1884年には土地改正法(The Land Amendment Act 1884)が成立し、温泉地や特異な自然(Natural Curiosities)等が保護区として指定された。また、1892年の土地法(The Land Act 1892)で公共の為の特異な自然及び景観に関する法律ができあがった(NZ Gov. online 2)。したがって国立公園という概念は政府によって考えられたもので、実際に国立公園ができたのは、ホロヌクが土地をニュージーランドに譲渡してからさらに10年近くたった1894年のことなのである。政府はその土地を公共のために公開して利用することを考えたが、その大きな理由は観光による経済発展が目的であった。

### 3. 政府の思惑:観光地としての利用

実はニュージーランドは早くからその風景の美しさや温泉などの場所がレジャー、レクリエーション地として本国から注目され、1840年代にはすでに公共のレクリエーション地区や保護区が存在していた。タウポ湖やトンガリロ周辺の美しさもすでに多くの観光客に知られており、1869年にはエジンバラ公のアルフレッド皇太子がスエズ運河の開港によりニュージーランドを訪れ、1879年にはトーマス・ブラッケン(Bracken)が「ニュージーランドツーリスト」(The New Zealand Tourist)を出版し、その後定期的に新聞、雑誌を発行していた(Nightingale & Dingwall 2003)。彼は詩人であり、ニュージーランドの国歌の作詞をした人物でもある。また、本国で国際観光をスタートさせたトーマス・クックは1881年にはニュージーランドにも代理店を設け、ニュージーランド観光をスタートさせていた。したがって初期の旅行者はイギリスやアメリカの富裕層が中心で、6カ月のグランドツアーの間にニュージーランドにも寄港するという形態の旅行をしていた。1882年にはソーペ・タルボット(Thorpe Talbot)がニュージーランドの最初のガイドブックを出版した。また、J.H.ケリーニコルス(J. H. Kerry-Nicholls)は1884年に出版した『王の国』(The King Country)の中で北島の火山地帯を公共の公園(public park)にふさわしい場所だと記述している(Boast 2017 85)。同年には土地改正法(The Land Amendment Act)に基づき温泉や特異な自然(Natural curiosities)を保護区として指定している。1886年以前のニュージーランドで最も人気のあったツアーはロトマハナ(Rotomahana)湖にあるピンク&ホワイトテラスへ行くものであった。この地域ではトゥホランギ

(Tuhourangi)のマオリが観光業に携わっており、ガイドやカヌー、食事宿泊、その他の面倒をみていた。しかしながら、1886年におこったタラウエア(Tarawera)の噴火によってすべての観光施設が破壊されてしまった。そして翌年の1887年にマオリの首長のホロヌクがトンガリロ山とその周辺の山を寄贈したのである。このタイミングでトンガリロに人々の関心が集まり、アルフレッド・ニューマン(Alfred Newman)が議会でアメリカのイエローストーンのようにトンガリロの景観を守るべきだと訴えた。

しかし、1890年に入ると、バランス首相は次々と土地関連法を成立させ、当時の土地相だったトーマス・マッケンジー(Thomas Mackenzie)を使って大々的な土地改革を実施した。そしてバランスは「トンガリロは植民地にとっては素晴らしいギフトとなるであろう。そして、必ず観光地としての世界の名声を博する公園となるだろう」と述べ、彼の関心は自然景観の保護というより観光開発に関心があった(Shultis 1998, 197)(Harper & White 57)。このころから自然保護団体や他の圧力団体も運動を起こし、1898年にはネルソン協会(Nelson society)がロイ渓谷に国立公園を設立する運動を起こした。1901年に観光及び健康リゾート局が設立され、その2年後に景観保護法がつくられ、その結果、この時期には105ヶ所の風景、歴史及び温泉地保護区がつくられるまでになっていた(NZ Gov.online 3)。

## IV. 結論

このような経過を踏まえると、ニュージーランドの国立公園もその動機には、複数の思惑が絡み合っており、マオリの首長のホロヌクは自らの聖地を守るために政府への寄贈を決めたが、ニュージーランド政府は鉄道路線を開通させて、北島の美しい風景と温泉地を観光開発の為に利用することで、経済の立て直しを図ろうとしたのである。周辺の土地所有者であったマオリの人々もその恩恵にあずかろうと観光ビジネスに参画した。このようにニュージーランドの国立公園は温泉や自然風景地の遺産とマオリの文化遺産とが融合されて設立された国立公園といえよう。しかし、ニュージーランドの国立公園はマオリ族と政府との土地所有を巡る問題が再燃しており、特に先住民族の権利が見直されてきている近年は、国立公園によってはマオリとの共同管理の形もでてきており、テ・ウレウエラ(Te Urewera)はかつて国立公園だったのだが、現在は国立公園の名称が外れ、独自の保護区としてのレク

リエーション利用がなされている。トンガリロ国立公園についても土地所有を巡る解釈の問題が見直されてきており、ホロヌクの子孫がマオリ族との共同管理の提案を出してきている(Stokes 2006)。こういった先住民と政府との国立公園を設立する際に起こった土地を巡る問題はアメリカ、オーストラリア、カナダの国々でも起こっており、改めて先住民と国立公園の土地所有を巡る問題が浮き彫りにされてきている。ニュージーランドの初の国立公園設立は1894年であるが、ホロヌクがトンガリロを寄贈した年の1887年をニュージーランドの国立公園誕生の年と捉えるニュージーランド人も多い。それだけ彼らの胸に残る画期的な事件だったのである。後に国立公園行政の見直しとともに総合的な管理のための国立公園法が成立したのはそれからさらに半世紀がすぎた1952年のことである。また、トンガリロ国立公園は1990年には世界自然遺産に指定されたが、さらに1993年には世界最初の文化的景観としてユネスコの認定を受けた。これはトンガリロの自然遺産とともに、マオリの信仰の対象地としての文化的側面が評価された結果である。こういった点からもニュージーランドのトンガリロ国立公園は、19世紀に誕生したアメリカ、オーストラリア、カナダの国立公園とは異質のタイプの国立公園を誕生させたと言える。

### 主な参考文献

- Boast, R.P.,(2017). Gift of the Peaks: The Origins of Tongariro National Park, Hors Serie XXI Do Cultural and Property Combine to Make “*Cultural Property*”, pp.73-100 [pdf]
- Frost, W & Laing, J., (2013). From Yellowstone to Australia and New Zealand : National Parks 2.0, *Global Environment*, Volume 6, No.13, pp.62-79.
- Harper, M. & White, R.,(2012). How National Were the first National Parks? Comparative Perspectives from the British Settler Societies, In Gissble, B, Hohlerd, S, & Kupper, P. ed., *Civilizing Nature: National Parks in Global Historical Perspective*, New York, N.Y. : Berghahn Books, 50-67.
- Nightingale, T. & Dingwall, P., (2003). *Our Picturesque Heritage 100 Years of Scenery Preservation in New Zealand*, Science & Research Unit, Dept. of Conservation, Wellington, NZ.
- Shultis, J., (1998). The Creation of National Parks and Equivalent Reserves in Ontario and the Antipodes: A Comparative History and Its Contemporary Expression. In Marsh, J.S. & Hodgins B.W. ed., *Changing Parks: The History, Future and Cultural Context of Parks and Heritage Landscapes*, Toronto: Natural Heritage/Natural History Inc., 189-208.
- Stokes, J. (2006). Tribe Wants Mountains and Peaks back, *New Zealand Herald*, Oct.21.

### Online文献

- 外務省「ニュージーランド」<http://nzhistory.govt.nz/culture/history-of-new-zealand/> (2019.8.24取得)
- Department of Conservation 1, *Fascinating facts about Tongariro National Park*, accessed 1 June 2019, (<http://www.doc.govt.nz/park-and-recreation/place-to-go/central-north-island/places/>).
- Department of Conservation 2, 1994, *Nomination of Tongariro National Park for inclusion in the World Heritage Cultural List “He Koha Tapu-A Sacred Gift”*, pp.6-11, accessed 1 June 2019, (<https://www.doc.govt.nz/documents/science-and/casn68a.pdf>).
- New Zealand Government 1, *A History of New Zealand 1769-1914*, accessed 8 August 2019, (<https://nzhistory.govt.nz/culture/history-of-new-zealand/>).
- New Zealand Government 2, *The Treaty of Waitangi Timeline*, accessed 1 June 2019, ([www.treatyofwaitangi.govt.nz/](http://www.treatyofwaitangi.govt.nz/)).
- New Zealand Government 3, *Scenery Preservation 1903-1953*, accessed 16 September 2019, (<https://nzhistory.govt.nz/culture/scenery-preservation/>).
- Story: Te Heuheu Tukino I Herea* accessed 4 June 2019, (<https://teara.govt.nz/en/Biographies/2t19/te-heuheu-tukino...>).